

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	三浦 学	学校名	宮城県涌谷高等学校
教科(科目)・領域	地理歴史(地理A)	対象学年(人数)	3年選択(36名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2019年11月8日(金)		

【実施概要】

1. 単元名(活動名): 多文化共生を「自分ごと化」～探究的な方法を通して～					
2. 実践する教科・領域: 地理歴史科 地 理 A	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定): ①現代社会における国際化の特徴を理解する。(ボーダーレス化, 相互依存, 地球市民としての生き方) ②国際化・多文化共生の意義を考える。 ③探究的な学びを通して, 多文化共生について「自分ごと化」できる。					
5. 単元の 評価規準	①知識及び技能	現代社会における国際化の特徴や具体的な地域における多文化共生についての基礎的な知識を理解する。			
	②思考力, 判断力, 表現力等	多文化共生の解決に向けての課題を自ら設定し考える。			
	③学びに向かう力	多文化共生に向けて「今, 自分ができること」を考える。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観, 教材観, 指導観)	<p>【単元設定の理由あるいは単元の意義】</p> <p>本単元は, 2年次に地理Aで学んだことを基礎とし, 現代社会における国際化の進展の背景や諸課題, 世界の諸地域における多文化社会の事例を復習ながら, 学び直しすることでグローバル化や多文化社会についての知識の再構築化を図る。そして, 今後の日本社会は人口減というかつて日本が経験したことがない時代を迎えていく。そのような時代では「多くの想定外」のものが生まれ, 今までの「普通」はこれからの「普通」ではなくなってしまう。そのため今までの経験則ではなく, 目指すべき未来を考え, そのためにどのような行動をし, 今何をしなければならいかを考えていく「課題解決能力」を身につけさせていきたい。今後の社会を見据えるとこれまで以上に「多文化共生の考え」が大切になってくる。教科教育で学んだ知識や理解が, これからの学びへの意識づけとして意味あるものにしていきたいと考える。生徒の他文化理解を深め, 多文化共生へ向けての生徒自身がSDGsの大きな目標である「誰一人として取り残されることがない世界」を実現していくことを意識させたいと考える。</p> <p>【児童/生徒観】</p> <p>2年次に全員地理Aを履修しているため地理的な知識, 考え方, 技能は身につけている。また, 選択している多くの生徒は今年度, 地理Bを履修している。1年次より「主体的・対話的で深い学び」の実践を多く経験しており, グループで課題を考え, それについて学びを深めていくPBL的な学びの実践を行っている。今年度に入ってから「問い」の設定について多くの時間をかけ, 「6W2H」を意識させながら, 生徒自らに問いを立て課題意識を持ちながら学びに向かう姿が見受けられる。また, ICT機器の利活用, ウェビングやブレインストーミング, KJ法などは1年次より総合的な学習の時間や他教科等でも行っているため基礎的な考える力は身につけている生徒が多い。</p>				

	<p>【教材観】</p> <p>本単元を学ぶにあたり、第1, 2限は昨年学習した内容を復習する知識・理解に関わるワークシート, 第3限以降は生徒の内面を成長させていけるような教師オリジナルのものを作成していきたいと考える。だが, 教師がクローズドクエスチョンで答えを導いていくものではなく, 生徒自身の思考の中でオープンクエスチョンの問いを立て, グループで協働しながら課題を解決していく教材を作成したい。また, ICT機器の利活用を通し, 単なる知識だけでなく, 視覚的にも授業がテンポ良く進める工夫をする。</p> <p>【指導観】</p> <p>本単元の指導は, 探究的な問い作りの中で生徒自身が自らの学びの解をアウトプットできるように工夫する。SDGs視点の学びも学習の中に取り入れ, グローバルイシューが社会の問題とどのように連動し, それを解決していくにはどのようにしていくかを生徒にデザインさせる。生徒自らが社会課題を考えるとすることは, 生徒自身が問題意識を持つということになる。生徒たちが日常的に生活をおくる身近な地域から, 日本社会の直面している諸課題やグローバルな問題に対して, 生徒たち自らがその解決のためのアクションプランを考える学びにしていきたいと考えている。学びのプロセスは, 「理想のゴールの想定」→「それを達成するためのアクションプラン」→「今, 何をしなければならぬか」を考えている。この思考はSDGsの未来の姿から逆算して現在の施策を考える発想をもとに目標を定めて, それに向かって学びを行えるような指導を心がけていきたい。</p>
--	---

7. 単元計画(全 5時間)

時	ねらい	学習活動	資料など
1	グローバル化について考える。	<ol style="list-style-type: none"> 1 交通・通信の発達によって, 時間的な距離が短縮され, それに伴って各地域間の結びつきが活発化していることを理解を深める。 2 国家間の結びつきと貿易について知る。 3 グローバル化により, わが国の貿易品目や相手国が変化していることに気付き, その一例として日本とアフリカの関連を確認する。 	国際理解教育実践資料集
2	オーストラリアにおける多文化共生について知る。また, 今後の日本の人口の遷移について考える。	<ol style="list-style-type: none"> 1 多民族国家であるオーストラリアを事例として, 多文化共生社会に向けての取り組みについて学ぶ。 2 資料を見て, 日本の人口がどのように推移してきたのか読み取り, 今後の人口の遷移について考えてみる。 3 異なる文化の人々が共に生活するには何が必要か考えさせる。 	内閣府 平成29年「高齢社会白書」
3	多文化共生がなぜ大切なのかを考える。	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本の移民政策について南米への移民について歴史を辿る。 2 氷山モデルを活用して, 外国人が日本で本当はどのように生活していきたいのかを考える。 3 資料を読み取り, 宮城県や涌谷町の外国人の人数や今後の外国人人口の動向を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・眞子さまがペルー表敬訪問した時の動画 (You Tube 利用) ・宮城県推計人口 ・法務省「在留外国人統計」

4 (本時)	多文化共生について考えを深め「今、自分が何ができるか」を考える。	<ol style="list-style-type: none"> 1 多文化共生を「自分ごと化」していくために問いづくりを行う。 2 宮城県に居住する外国人の児童生徒が生活していく上で何に困っているかを考える。 3 NHK for School を視聴し、外国人が悩む言葉の壁について考え、自分の意見を述べる。 4 多文化共生に向けて課題解決するためのグループ活動を行う。 	宮城教育大学免許更新講習資料より (市瀬 智紀 氏)
5	SDGs とは何かをゲームを通して体験する。	・2030SDGs カードゲームを行う。	2030SDGs カードゲーム (授業者が公認ファシリテータ)
6	SDGs カードゲームの振り返りを通し、多文化共生について理解を深める。	・2030SDGs カードゲームの振り返り。	2030SDGs カードゲーム

8. 本時の展開

本時のねらい：多文化共生に向けて、「今、自分ができること」を考える。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)
導入 (2分)	本日の授業の目標とグラドルールを提示 <グラドルール> ①はっきりとした声で話し合いをすること。 ②間違っても良いので、自分の意見を述べる。 ③チームで協力すること。 ④他者を認め、受容すること。	生徒に授業の目標やグラドルールを提示する。	
展開 (40分) セクション① (10分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 地域社会に住む外国人とよりよく共生するためにどうするかについて問いを作ろう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・題材 「地域社会に住む外国人がよりよく生きるためにはどうしたら良いか？」の問いを自分ごと化する。 ・この題材には問題になる論点と方向性が含まれていることを確認する。 <p>①問題になる論点 「外国人が地域社会で生活する時、困ることは？」</p> <p>②方向性に関する論点</p>	問い→アウトプットまでのプロセスを考え6W2Hも意識し、主語や述語が明確な問いを作れるようにする。 氷山モデル(既習済)の意識面以下の価値観を意識して作成する。 ・Why は物事の本質のゴールになるので、最初の問い作りの段階では、「Why」はあまり使わないように指示す	

	<p>必要だと思いますか？自分の経験も入れながら考えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の支援。言語教室。 ・スーパーの改装 ・町の支援が必要。 <p><Decision question></p> <p>外国人と共生する社会を作るため、皆さんができる「とても小さな一歩」は何ですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語の時間を大切にする ・困っていたら助けたい。 ・勇気を持って接してみたい。 		
(2分)	<p>グループで意見の共有をしよう</p>	<p>ORID を利用して整理したことをグループ内で共有する</p>	
<p>セクション⑤ (5分)</p>	<p>NHK for School の視聴</p> <p>外国人が悩む言葉の壁について動画を見よう。そして、思ったことをグループで共有してみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院が大変。 ・行政も外国人が必要になるのでは？ ・通訳増やす。 ・自分が外国語を話せるようにする。 	<p>NHK for School の動画を視聴し、日本に来ている外国人の思いを考えられるようにする。</p>	<p>NHK for School 「言葉の壁」</p>
<p>セクション⑥ (10分)</p>	<p>(課題解決に向けての活動)</p> <p>多文化共生に向けての理想のゴールを設定し、それに向けてどのようなアクションプランを考え、今、自分が何をすべきかを考える。</p> <p>○課題解決に向けての理想のゴール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人と地域の人が地域で交流を深める ・外国人とコミュニケーションを取れるようにする。 <p>○課題解決に向けての理想のゴールを達成するためのアクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のお祭りで一緒に活動する。 ・語学力をアップする。 <p>○課題解決に向けて、今、何をすべきか？。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生の私たちもお祭りでブースを作り、一緒に活動する。 ・外国語を学ぶことを恐れない。A L T と練習する。 	<p>「理想のゴール」→ 「アクションプラン」 →「現状把握」を考えるワークを通して、 今、自分が何ができるかを検討する。</p>	

<p>まとめ (4分)</p>	<p>・授業を通して気がついたこと、そして、これから地域社会における多文化共生を進めるにあたり自分自身にどのような可能性があるのか考えてみよう。</p> <p>・次時までには各自の考えをまとめてくることを伝える。</p> <p>・SDGsの17番目のゴールの「17・17のターゲット」を確認し、自分が多文化共生社会を創っていく一人としてどうするのかを考える。</p> <p>今回は、みんな自身が起点となる「行動」そのものと、それによって生じる「影響」についてみていこう。</p>		
<p>9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)</p> <p>1 日本で生活する児童生徒がどのようなことに困っているか理解できたか。(ワークシート)</p> <p>2 多文化共生に向けてどうすれば良いのか課題の設定ができたか。(ワークシート)</p> <p>3 多文化共生に向けて「今、自分ができていること」を考えることができたか。(ワークシート)</p>			
<p>10. 学習方法および外部との連携</p> <p>昨年学んだ地理Aの知識・理解を復習を行うことから本単元は開始し、それをもとに実際の社会における多文化共生社会実現に向けてPBL的な学びを行うことで、生徒が学習の中で実際に「行動」を行うことができるような質を高めることを狙いとしている。そして、本単元の最後には2030SDGsカードゲームを通し、今の現実の世界には「価値観」「生活環境」が違う中に多くの人が共存していることを学ばせていきたい。本単元では外部の方をお招きして講演等は厳しいが、生徒が学んだことを生かして今後の人生で自ら地域社会で少しでもアクションを起こせるようなマインドを築いていきたい。</p>			
<p>11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</p> <p>校内では、「生徒の学び」に火をつけることを大切にしていきたい。現在教育の世界では大きな変革が行われようとしており、society5.0の社会に向けて学びが変化している。生徒自らが未来を見据え課題を設定し、自らその解決に向き合っていく学びを少しずつであるが校内で紹介しながら進めていきたいと考える。</p>			

【自己評価】

<p>12. 苦勞した点</p>	<p>苦勞したことは、問いづくりのワークのバランスである。授業をデザインするにあたり知識理解だけをインプットとアウトプットしている状況だと文科省が新学習指導要領で提唱している学力の3要素のサイクルが上手く回らないと考えた。主体的・対話的で深い学びの実現に向けて「深い学び」を意識させていくには、自分で課題を設定し、その課題解決に向けて行動させていくための「問い作り」が大切であると感じた。しかし、授業を通して生徒の考えを深めれば深めるほど、生徒たちは自分で立てた問いの答えを知りたいような状況に</p>
-------------------------	---

	なり、授業の進度に時間的にゆとりが持てることもあった。言い換えると、生徒たちが学びに向かって自走し始めていく姿が見れるようになった。
13. 改善点	1時間の授業における問いの設定のバランスが改善点としてあげられる。問いづくりの反対には課題解決があり、問いを作り、それをしっかりと調べ生徒たちがその時間納得できるような授業をデザインしていく必要があると感じた。問いを立て、生徒たちが納得して自分ごと化していくにはそのような授業デザインしていけば今後の社会においても生徒たちは自ら行動変容をしていくのではないかと感じる事ができた。また、今回の学びを総合的な探究の時間との接続を意識していたが、そこが総合的な探究の時間の進度との兼ね合いもあり実際には行うことができなかったので次年度以降、教科教育と総合的な探究の時間の接続を関連させられるようなプログラムを構築していきたいと考えている。
14. 成果が出た点	<p>問いをつくることで、生徒たちとはあまり関係ないと感じていた多文化共生について生徒たちは身近に感じてくれた。今回の授業実践で、生徒たちは普段あまり考えない多文化共生について考えたことで、外国人が何を必要としているのかを自ら問いをつくることで、自分の立場で考えることができた。</p> <p>また、私自身「多文化共生社会」について授業を実践したが、最初は宮城県の地方の生徒たちと関わりがどうあるのだろうと悩んでいたが、生徒たちが問いを立てながら考えたことで身近な生活に関連させることができた。そして、SDGs 的な視点の学びとも多くのことが関係を持っていたので、世界で起きていることが身近な社会でも起きているということ学ぶことができた。</p>
15. 学びの軌跡(児童生徒の反応, 感想文, 作文, ノートなど)	<p>SDGs を知識としてしか捉えることができていなかった生徒たちが授業後に書いた感想を原文のまま掲載する。</p> <p>A. 多文化共生社会の実現に SDGs の 2～5, 8, 10, 11, 16, 17 が関係していると思う。私が最初に取り組むのは看護師を希望しているので英語をもっと頑張らないと実感した。</p> <p>B. 多文化共生社会実現には、様々な人と協力して行動することと自分からアクションを起こす必要があると感じた。言い換えると S D Gs の誰一人取り残されない社会を実現することにつながるのではないかと考えた。</p> <p>C. 生まれた地域や国が違っても人なので協力していく必要性を感じた。自分も一人だと寂しいので、その視点で様々な人に接していくようにしていきたいと思う。SDGs で定められていることで不平等がなくなるのではないかと考える。</p> <p>D. 日本に来ている外国人はおそらく自国と同じように生活していきたいと思った。眞子様のパルー表敬訪問の時の話を聞いて、その時代に南米に渡った日本人たちはすそうと思った。言い換えると、私たちも温かく受け入れる心を持つ必要があることを感じた。</p> <p>E. 言語の壁をなんとかしたいと思った。私も英語は苦手ですが、日本に来ている外国人は日本語が苦手だと思う。でも、小学校の様々な国の国籍の子供たちの運動会の様子を見たら自分ももっとコミュニケーションを取る必要があると思った。</p>

	<p>F. 外国人と共に接する機会を作って一緒にアクションプランを作っていく。先生の授業で目標を決めてから今を考えるワークがとても大切だと思った。一つずつ解決しても時間がかかるのでゴールの設定が大切なのではと感じた。</p>
<p>16. 授業者による自由記述</p>	<p>今回の授業で目指したのは、「No one will be left behind」の考えを目指した未来を描くことを意識した。私自身 Society5.0 を意識した教育とは何かということを常に考えており、AI が苦手とされる「深く思考すること」を生徒にチャレンジさせたかったことが「問いづくり」中心の授業を行なった狙いであった。</p> <p>「問いづくり」で生徒が自ら課題を設定し、それに向かっていく姿勢こそが「学びに向かう力」になるのではないかと考えた。新しい学習指導要領では「探究」というものがカリキュラムマネジメントのコアに位置づけられ、その本質とされる「自己の在り方、生き方と一体的で不可分な課題」と定義されている。生徒が未来志向で考えたことを実際に行動できるように教科教育と総合的な探究の時間との連携を図りながら生徒の思考をより高度なものにしていく必要があるのではないかと常に考えている。</p> <p>授業を通して、生徒たちが自分で問いを立てて学びに向かう姿勢を連れてのが今回の一番の成果であり、それを今後は実際の行動に移していくことが大切であると考えることができた。来年度は今回の授業をもう一度実践し、生徒が行動することで何かを得ることを目的とした授業デザインを行っていきたいと思う。</p>

参考資料:

- ・ JICA 地球ひろば『国際理解教育実践資料集』 2019年8月28日
- ・ 佐藤真久, 広石拓司 著『ソーシャルプロジェクトを成功に導く12ステップ』
(みくに出版, 2018)
- ・ 寛 裕介 著『持続可能な地域のつくり方』 (英知出版, 2019)
- ・ 溝上 慎一, 成田秀夫 編『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』
(東信堂, 2016)
- ・ ダン・ロスステイン, ルースサンタナ 著『たった一つを変えるだけ』 (新評論, 2015)
- ・ 日本ESD学会, 学会誌編集委員会 編『ESD研究』 (2019)
P37~43 神田 和可子『ESDにおける変容的学習』
- ・ PBL実践のためのテーマ別講座, 井澤 友郭 (こども国連環境会議推進協会)